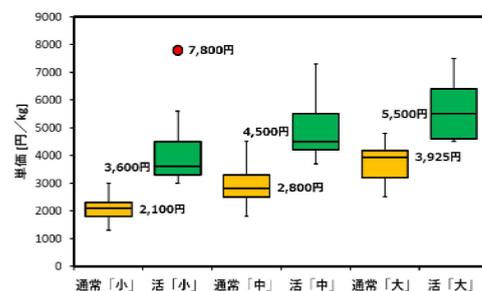


底びき網漁業の操業の効率化と経営改善に向けた取り組み

【成果の概要】

秋田県の北部地区をモデルケースとして、現在使用されている底びき網漁具をベースに、簡単かつ安価に対応可能な改良方法を検討し、船上作業の支障となるドロやヒトデ類の大量入網（左・中写真）を抑制すると同時に、必要な漁獲対象種をこれまで通りに漁獲することが可能となる技術を確立しました。この技術を応用した改良漁具の普及がモデル地区で既に始まっており、漁場の海底環境に応じた使用漁具の選択が可能となり、船上作業の軽労化が実現しているところです。

改良漁具によるドロ・ヒトデ類の入網抑制は、漁獲物の付加価値向上にも繋がる成果です。例えば、品質面の向上や活魚で取扱いの可能性が高まので、漁獲物販売収入の底上げを目指して、当該地区ではこれまで行われていなかったトヤマエビの活出荷を試験的に取り組みました。この活出荷により、全てのサイズ銘柄で単価が向上し（通常製品の最大1.7倍）、高付加価値化を達成しました（右写真・図）。



【調査・研究の背景】

全国各地の底びき網漁業は、我が国の食文化を支える様々な魚介類を供給する重要な漁業種類です。また、漁業生産を通じて、各地域の観光業から関連産業を下支えする役割も果たしています。一方、昨今の資源状況や魚価安等に対応するため、より効率的な漁業生産体制の確立が必要です。そこで、本漁業が抱える課題について、「漁具漁法的アプローチ」と「販売戦略的アプローチ」の2つの軸で整理し、操業の効率化と漁獲物販売収入の増加による経営改善に向けた実証調査を行いました。

【今後の展望】

更なる操業の効率化を目指し、これまでとは異なる発想による新たな漁具の開発を行うことで、漁具漁法の抜本的な改善による操業の効率化（労力に対する収益性の向上）に向けた取り組み、さらに、高付加価値化とともに未利用低利用魚の有効活用による全体的な収益の改善を目指した取り組みを合わせて経営の改善を図っていきます。